

桃山時代の能役者の手紙

天野文雄

京都大学文学部古文書室の長井文書は、秀吉時代の五奉行の一人たる浅野長政に仕えていた長井伊賀守（慶長14年没）以来の同家文書の影写本であるが、ここに桃山時代の能役者の書状が二通含まれている。この時代の能役者の書状は希覯に属し、内容も興味深いものがあるので、以下、紹介におよぶ。

一通は、秀吉の能の師で、金春大夫安照の弟子であった暮松新九郎のもと認められる書状である。

（前欠）

御座候へ共如此申上也。

其元為御見廻申上候。御前相替儀も無之候。御きげんよく毎日御本丸へ被成出御、夜々ニ西丸にて御遊覧共被成候。秀頼様御大人被成候者、□□頓而可為御上洛候様との事候。弥敷事にて不寄夜中、可申上候。恐惶謹言。

暮新九郎

〔花押〕

十一月十五日

進上

彈正様家人々御中

難読箇所が多く、文意不明の部分もあるが、文面は「暮新九郎」が浅野弾正に宛てて、「御前」の近況を報告したものである。秀頼が「大人」になったら（『いい子になったら』の意か）上洛云々、とあるから、この「御前」は秀吉で、「暮新九郎」は秀吉の近習暮松新九郎と認められる。拾丸が元服して秀頼を名乗ったのは慶長元年十二月十七日であり、秀吉は慶長三年八月に没しているから、この書状の日付十一月十五日は慶長二年ということになる。当時、秀頼は京都の秀吉の亭におり、秀吉は伏見にいた。その秀吉の最晩年の躰鏝たる様子と慈子秀頼を思うさまを、暮松新九郎が秀頼の養育係的な立場にあった浅野弾正に報告しているのである。

暮松新九郎は肥前名護屋で秀吉に能の手ほどきをした人物で、文祿二年十月の禁中能をはじめ、秀吉関係の能にはたいがい出演しているが、大山崎の八幡宮にかかわりがあった

らしいこと以外は、よく素性がわからない人物である。しかし、江村専斎（永祿8寛文4）の『老人雑話』によれば、「太閤肥前の名護屋に御座す時、呉松越後と云能太夫御見舞に参り、其時より能を御すきありて、御自分にも度々なざる、事也」とあって、暮松新九郎のことを暮松越後と記している。暮松新九郎が暮松越後であるなら、従来も暮松新九郎との関連が注意されてきた宝生家所蔵の五奉行連署の命令書の名宛人たる暮松越後が暮松新九郎その人の可能性がいつそう高くなるであろう。この命令書は秀吉の五奉行が暮松越後に對して、宝生座衆への配当米の配分についての肝煎（世話役）を命じた十二月二十五日付の文書で、『能楽』明治四十年五月号などに写真が掲載されているが、慶長二年十二月朔日付の、諸武将の配当米の分担を定めた「宝生座支配之事」を受けての命令とおぼしく、慶長二年の文書と推定される。新出の長井文書の書状によれば、慶長二年のこの頃、暮松新九郎は秀吉の側近として仕え、五奉行の一人たる浅野弾正とも親しいことが判明するが、これによって暮松新九郎が暮松越後と同一人たることはまず確実なのではなからうか。諸史料を総合すると、暮松新九郎は秀吉の晩年期にその側近として仕え、秀吉による大和猿樂四座の統制にかかわる実務などに

携わっていたことになる。補強史料は他にもあるが、これは家康膝下の「能奉行」たる永井右近(直勝)の職務によく似ており、その先蹤と言える。徳川幕府の能楽政策は、猿楽配当米の支給など、基本的に秀吉時代のそれをモデルとしているが、後代には若年寄の所轄となる能奉行的な職務も、その原形は幕松新九郎に求めることができそうである。なお、秀吉はこの頃、「夜々ニ西丸ニて御遊覧」とあるが、この「遊覧」は能にかかわるものである可能性が高いように思う。

もう一通はもっぱら謡役者として活動した観世又九郎の手紙である。

猶々其方次第ニ待れ候。

如仰久々不申承候処ニ御懇書過分之至候。然者御用御座候由、被仰候。今日者少余所へ参候間、明日成共明後日成共、天氣次第ニ奉待候。委曲面上之時、可申上候。

恐惶頓首。

五月廿三日

観又九入

了叱〔花押〕

観世又九郎了叱は『四座役者目録』によれば、永祿七年生れ、寛永元年に61歳で没している。室町後期に観世座の脇として活躍した観世小二郎元頼の三男。幼少の時には脇を勤めたが技が切れず、名人元頼の子が平均的な役者では具合が悪かろうと、生涯を謡を業と

して送ったようで、観世大夫宗節、同黒雪、叔父の古津宗印などに謡を習ったという。近年紹介された木下延俊(豊後日出藩主、秀吉の正室ねねの甥)の慶長十八年の日記によると、延俊が江戸から国元に帰る際、同年二月末から六月末まで京都に滞在していた延俊のもとに、観世又九郎(この時には了叱を名乗っている)が小鼓の観世又次郎道叱と頻繁に出入りしている。延俊は了叱に謡を、道叱に鼓をならっていたのである。二人とも延俊への稽古だけでなく、酒席の相伴や夜咄の相手もしている。延俊は六月末に京都をたち七月五日に帰国するが、了叱は道叱以上に延俊と親しかったらしく、九月十六日に豊後に下り、延俊から大歓待をうけ、十一月十四日まで日出に滞在している。京都でも豊後でも了叱が謡にしか関わっていないのは、『四座役者目録』の記事を裏付けている。

この手紙は観世又九郎が入道して了叱を名乗っていた時代のものであるが、年時は不明である。誰かから招かれたことに対する返事で(宛先はこれも浅野長政の可能性もあるが、不明)、文面には直接能とか謡にかかわる文言はないが、木下延俊の日記に記されたような、京都における謡専門の役者としての活動を窺わせる資料と言つてよいであろう。

(大阪大学助教授)